

教育委員会会議の概要（令和7年6月定例会）

- ◆ 日 時 令和7年6月23日（月）午後2時00分から午後2時46分まで
- ◆ 場 所 教育局 第1会議室
- ◆ 出 席 者

教 育 長	天 野 元	出席
委員・教育長職務代理者	佐 藤 淳 一	出席
委 員	山 田 理 恵	出席
委 員	庄 司 弘 美	出席
委 員	長谷川 真里	出席
委 員	永 富 良 一	出席
委 員	松 野 大二郎	出席

◆ 会議の概要

- 1 開 会
- 2 議事録の承認 5月定例会、6月臨時会
- 3 議事録署名委員の指名 松 野 委 員

4 報 告 事 項

- (1) 令和7年度仙台市標準学力検査及び仙台市生活・学習状況調査の結果について
(学びの連携推進室長 報告)

資料に基づき報告

佐 藤 委 員 学力のほうで気になるのが、理科に落ち込みが見られることである。これは昨年、一昨年の傾向を見るとどうなのか。理科や社会はどうしても単元学習のため、その単元のどこから問題が出されるかによって上下することがあると思うが、この傾向は近年どうなのか教えてほしい。

学びの連携推進室長 小学校の理科についてだが、4年生の理科、5年生の理科において、昨年度と同様に、目標値よりも5%以上下回っている結果となっている。例年、小学校の理科については課題が見られるという結果が出ているため、確かな学力研修委員会において課題に対する事例を考えてまいりたい。

佐藤委員 理科の話題が出てきたところで、学力検査の目的が3点あると冒頭で述べられているが、主眼に置くべきところは、生徒の実態を把握したことにより、教員の指導改善、指導力向上に向かうということ、教員の指導力向上はこどもたちの学力に直結しているため、どのようにして教員の指導力をこの実態把握から繋げていくかが非常に大切だと思っている。

かつては、提案授業のような形で、授業を一緒に作り、一緒に見ることによって改善方法を学ぶということを行っていた。しかし現在は、恐らくコロナの影響もありオンラインに移行したのだと思うが、例えば落ち込みが見られているところについて、みんなでもう一度再確認しつつ授業づくりをするなどの取組みは、現在行っていないということではよろしいのか。

学びの連携推進室長 令和2年のコロナ禍を受けて、令和2年度はこの検査は実施しなかったが、令和3年度から復活した。以前は授業提案ということで、授業を提案してくださる学校に参集して授業を見せていただいていたが、令和3年度からはオンラインで授業の改善事例について配信をするという形でコロナ禍対策を行っていた。オンラインにすることで、より多くの先生方の参加ができるというところが逆にプラスとなっており、先ほどの説明でもあったとおり、令和6年度については、市内546名の先生方がこの授業改善事例について研修を受けている。また、学校によっては、研修の1つとしてみんなで1つの画面を見ているところもあるため、研修を受けている実数はさらに多いと思われる。それだけより多くの先生方が、この検査の結果に係る改善事例について学んでいると考えている。

佐藤委員 オンラインによる研修は定員が増えるということで、以前は物理的に頭打ちになっていたという課題をうまくクリアしていると感じており評価している。

ただし一方で、教員の指導力向上に当たり、モデルになる授業を直接見る機会が大幅に減少している気がする。それは教育センター等の取組みも関わってくるかと思うが、やはり先輩と一緒に1時間の授業にこだわって授業を作る。そして、その授業を皆で見合って評価し合う、検討し合うということが、次の世代の若い教員を育てていく、学力、指導力を向上させる大きな手だてだと思う。そのあたりをうまく加味できるような形で、オンラインと並行しつつ、今までのように量を多くということではなく、難しいようであれば、焦点化を図り1年に1回のペースでも行えると良いかと思う。どうしてもこの流れでいくと、11月、12月あたりに提案授業をするため、いつも同じところに年間指導計画が重なってしまうというマイナス面もあったが、オンラインだとある程度それはクリアできる。しかし、もう一方の流れとして、実際の授業を見ることが残していただければと思っている。

永富委員 「確かな学力」と「たくましく生きる力」の育成を目指してということで、参考資料にも「学習意欲」の科学的研究プロジェクトを東北大学の加齢医学研究所と行っており、また、それに伴い新たな質問項目を加えたというところがあり、学習意欲に関する仮説を検証するために様々な質問項目を加えたと思うのだが、差し支えない範囲で、どのような要因が学習意欲に関連していると考え、調査に当たられているのか、分かる範囲でお答えいただきたい。

学びの連携推進室長 こちらは過去の事例となるが、この検査を受けて、学力と生活・学習状況調査の相関関係を東北大学の加齢医学研究所に分析いただき、スマホや睡眠時間、朝

食、読書の時間といった項目が学習意欲に関連し、学力にも相関関係が見られるという結果が出ている。

永 富 委 員 1つ気になるのは、相対的に多い、少ないでそのような違いがあるということだと思うのだが、ここでは学年ごとに数値が出ているにも関わらず、学年ごとに意欲が高まっているなど、そのようなことはここからは見てとれない。そのようなことを期待するのであれば、今はスマホにしても様々な情報を取るという学習支援教材としての効果も期待されているため、そのような面とのバランスのようなことが見てとれるようになると良いのではないかと考える。

学びの連携推進室長 そちらのほうも、東北大学と連携しながら検討してまいりたい。

山 田 委 員 例えば、別添資料13ページの質問10番から14番ぐらいまでのところでは、令和6年、7年だけが数値が高く、それ以外の3年は下のほうでまとまっており、ここはきれいに2つに分かれているように見える。何か質問の仕方を変えたなどあるのか。

学びの連携推進室長 昨年度から、この生活・学習状況調査についてはC B T形式で、1人1台端末を使いオンラインで実施している。また、問題の内容を変えたり、順番を変えたりというところもある。どのようなところが影響してこのようなグラフになっているのか、正確なところは分析できていないが、昨年度の変更点としてはそのような部分がある。

山 田 委 員 オンラインで実施した場合、このように2つに分かれるものなのか。

学びの連携推進室長 それが関係しているかどうかは分析ができていないところであり、我々としても、令和6年度、7年度が過去3年度と比べて数値が上がっているため、C B Tの影響が大きいのではないかと捉えていたところだが、今年度、昨年度と同等の数値が出たこともあり、C B Tによる影響は少ないのではないかと考えており、こどもたちが実際にこのように感じているのではないかと考えている。

また、令和2年度にコロナ禍となり、学習活動が制限されてきたところもある。コロナ禍が明けたということで、学校の様々な学習活動、学校行事が従来どおりとなると共に、以前にも増して活発になっている学校もあるため、そのような影響もこの数値に表れているのかと感じているところである。

山 田 委 員 オンライン回答になったのは全ての項目か。

学びの連携推進室長 全ての項目である。

山 田 委 員 ほかの項目については2つに分かれていないものもある。

学びの連携推進室長 おっしゃるとおりである。

山 田 委 員 ぜひその辺も調査いただければと思う。

学びの連携推進室長 連携している大学とも分析を検討していきたいと思う。

永 富 委 員 前半のほうに目標値が設定されており、教科の単位によって値が違うということが見てとれるのだが、目標値そのものはどのように決まっているのかお示しいただきたい。

学びの連携推進室長 この目標値というのは、前年度学習した内容を検査しており、標準的な時数をかけてこどもたちに学習指導を行った場合に期待する数値となっている。また、これまでの様々なテスト結果のデータの蓄積や、業者で行っているプレテストなど、そのようなものを加味して設定した数値と伺っている。

永 富 委 員 先ほど佐藤委員がおっしゃった、教員の指導力に結びつけていく際に、目標値

というのは重要な数値であるかと思うが、目標値をどのように使うのか分かりにくかったため聞かせていただいた。

佐 藤 委 員 仮にコロナ禍の影響があるような場合は、コロナ禍前のデータと一度重ねると良いかもしれない。それで影響があるようなバイアスがかかっているかどうかを含めて、様々なことが分かると思う。

生活・学習状況調査の中で注目したいのは自己肯定感の項目で、高く推移しており、良い結果が出ているのだが、こどもたちの自己肯定感というのは、周りの同級生や関わる先生、それから家庭での大人たち、親たちが、いかにそのこどもを肯定的に見ようとする姿勢や思いが、間違いなくこどもの自己肯定感を育てているのだと思う。否定的に見ることで、逆の方向に育っていく、感情を持ってしまうということがあると思う。このデータは全市的なものであるから非常に良いが、学校別や学年別、学級別に見ると、このデータとは違ったデータが出ている部分があるはずである。今年、平均より下になっているところは確認が必要であり、自分に良いところがあると思わないような自己否定のこどもも、一定数は存在し、相当数の学級、学年、学校があるということを明確に伝えておくなど、学校や担任自体がそのような視点で自分の学級や学校をしっかりと分析できる力を示してあげることが重要であると感じる。どうしても全市的に良い傾向になると自身の学校も良い傾向と思い込んでしまうが、実際に間近のこどもたちを見ているとかなりむらがあるはずなので、そこに対する注意喚起や、分析を促すなど、すでに行っているかと思うが、注視いただければと思う。

学びの連携推進室長 別添資料の11ページ4番、6番の項目にも関わってくるかと思うが、「学級では、自分のよいところを認めてもらっていると思う。」や「先生は、あなたの良いところを認めてくれていると思う。」といった項目が、過去5年で一番高い数値を示している学校、学年が多くあり、ふだんから先生方が学校においてそのような取組みをされていることが自己肯定感につながっているものと考えているところである。また、学校や学級などの単体についても、こちらで分析し、各学校に落としていきたいと思う。

庄 司 委 員 目標値についてお伺いしたい。別添資料の2ページを見ると、標準的な時間をかけて学習指導要領に示された内容について学んだ場合、到達してほしい標準学力検査における正答率のことと記載がある。検査自体は実施する学年の前年度の勉強内容で出されると思うが、どの教科も単元テストがあるため、その結果に基づいて単元ごとに割合が変わってくるのか。そして、この目標値というのは、毎年同じような数値なのか、それとも、そのこどもたち、その学年の単元テストの結果により翌年は変わるかなどを教えていただきたい。

学びの連携推進室長 目標値については、本市の児童の実態を踏まえての数値というものではなく、その問題自体について、標準的な時間をかけた場合にこれぐらいの割合のお子さんたちが解いてほしいというものとなっているため、前年度のこどもたちの結果により今年度の目標値を設定しているものではなく、その問題一つ一つに対して設定している数値である。分かりづらい説明で申し訳ないが、そのような形となっているため、問題の出し方や回答方式によって変わってくることはある。

永 富 委 員 先ほどの学習意欲について、仮説として、スマホの時間等があるかと思うが、それ以外にも、生活時間の中でこどもたちの習い事や補助学習など様々な要素が

あると考えられるため、そのようなものとの比較をしていただければと思う。もし、すでにそのようなことが分かっているのであれば、教えていただきたい。

学びの連携推進室長 毎年、東北大学に、その要因や相関関係を分析いただいているので、そのような面でも明らかになったところがないか、大学の方とも確認してまいりたい。

松 野 委 員 山田委員が先ほどおっしゃっていた、別添資料13ページに見られる、令和6年度、7年度の差を見ていたが、私はこれを見ていても違和感がなかった。実際、こどもたちと関わっていると、疑問に思ったことを「どうしたらいい？」と聞いてきたり、「次どうしたらいいかな？」と聞いてきてくれるこどもが、ここ2年3年で多くなってきている。なぜかと考えてはいたが、おそらくコロナ禍が明けてこどもたちが素直に活動できるようになり、また、地域などにも出られるようになったことにより、そこで自分たちの意見を言っているんだということを何となく捉えてきたのかと思っていた。佐藤委員がおっしゃったように、おそらくこれは仙台市内全体のことだと思うが、私の住んでいる地域はこれに近い形であったため、もう少し地域ごと、例えば区ごとに分かれると、データとして役に立つものと感じた。

また、こちらも付随する部分だが、別添資料19ページの「なぜだろう？と、疑問や不思議に感じるものがよくある。」と回答した子も多いが、そこに対して、18ページの38番、「自分自身の力で、何とか答えを見つけたいと思う。」という項目で自分自身に反省があり、どうしてもすぐに教えてしまうところがあったと感じたため、逆にこのようなデータを、今後、私自身が活用させていただきたいと感じた。

学びの連携推進室長 行政区、地域については、それを出すことにより、別の何かが出てくる可能性もあり、どのように取り扱うかも含めて検討してまいりたい。

5 閉 会